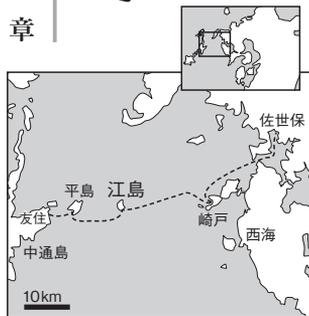


# 4

えのしま  
江島  
(長崎県西海市)

## 【レポート】民泊とりハビリー—— 一〇〇〇人ほどのふるさとでの島で

ライター 竹内 章



江島：佐世保から約47km、鰐浦島の崎戸港から19.6kmの海上に位置する。行政区域上は西海市に属する。面積2.6km<sup>2</sup>、周囲9.6km、人口117人(平成30年5月末現在)。入り江は多いが浅く波が荒い。捕鯨施設の遺構や異国船を監視した遠見番所などが残る。イセエビの産地として名高い。

江島の人口は、ピーク時の昭和三十年代には一二〇〇人を超えていたが、現在はその約一割にまで減少。かろうじて児童生徒四人が通う市立小中学校が一枚、診療所が一枚ある。

働きながら漁業を学ぶ漁業就業制度を利用して島に来た移住者もいたが定着が難しく、移住者数はここ数年で計三人にとどまっている。産業面では江戸時代、捕鯨基地として大いににぎわった歴史を誇ったが、近年は半農半漁の生活を送る人が多くみられる。沿岸で大型のイセエビが獲れることでも知られるものの、漁師は数えるほど。今ではほとんどが年金に頼った暮らしをしている。

一方、江島沖で洋上風力発電事業を展開する大型プロジェクトが進行しており現在、海域などで調査が進行中。島の住民も今後の行方を見守っている。

島の活力という点で衰えが隠せないのも事実だが、そんな中でも、今回は父親のふるさとであるこの島にイターンし民泊(※註)を柱とした事業に乗り出した女性と、理学療法士としてイターンした男性を紹介する。

(※註) 本稿では、農山漁村休暇法にもとづく「農林漁業体験民宿業」のこと。旅館業法上の面積要件の撤廃など、営業許可条件や各種規制が緩和されている。

### 残りの人生、島のために使いたい

民泊「江島さとや」女将／イターン 福田智美さん

#### 父のふるさとで始めたチャレンジ

「島で、こんな事業を始めたらどうだろう」「いま島で求



「江島さとや」女将の福田智美さん(56)。

められてる取り組みとは……」

離島活性化をめぐる議論になると、このような声を聞く機会は少なくな

い。だが、実際行動に移せる人はどれだけののだろうか。

江島で民泊「江島さとや」を経営する女将の福田智美さんは、島を舞

台に「想いを形にする」勇氣と実行力を併せ持つ。五〇歳を過ぎて、人口わずか一〇〇人強の島で女性一人で始めたチャレンジは、着実に実を結び始めている。

福田さんが、住んでいた大阪府から父親のふるさとである江島に移住したのは二〇一六年一月。幼少のころ、夏休み期間は江島で過ごすのが恒例で、そのころは島にもにぎわいがあった。

父の定年後、両親は島に戻り住んでいたが、二人が他界し実家が空き家になると次第に傷みも目立つように。同時に、島が活気を失っていくのも目の当たりにした。

「江島は空き家ばかりになった」「あの人も亡くなったよ」「この島も無人島になる」。そんな声を耳にするうち、寂しさが募るようになった。

そのころ、離婚を経験し子育ても一段落していた福田さんは、ある意味自由の身でもあった。「自分の残りの人生、島を元気にするために使いたい」。そう決断すると、迷いはなくなった。とはいえ島で暮らすには、収入を得る必要がある。就職先などなく、自ら仕事をつくり出す必要に迫られた。農業や漁業も頭に浮かんだが、それまで経験がなく、技術を学んだり収入を得られるまでには時間がかかりすぎると判断、選択肢から外した。

### 江島プロジェクトの三本柱で島に活気を

島で生きていくために収入を得ることと、島に人呼び寄せて活気をもたらすこと。この大きな課題を解決するため、移住前に一年半を費やして練り上げたのが「民泊」「ヒツジ牧場」「ブルーベリー栽培」の三つを柱とする「江島プロジェクト」だ。

核となる事業は「民泊」。島には、一人で暮らすには広すぎる実家があるので、それを活用することを思い立った。島に来てもらうには泊まる場所が不可欠だし、情報の発信源となる「拠点」としても活用できると考えた。

実家の古民家をリノベーションしたほか、離れの建物も一部屋増設、客室に改良し、「江島さとや」は二〇一七年



民泊「江島さとや」の外観。

三月、無事オープンした。

最大収容人数は七人、料金は大人一泊二食で七五〇〇円から。メディアなどに相次いで取り上げられた効果もあってか客足も順調に伸び、当初目的であった宿泊客の月平均三〇人をクリアするに至っている。

客は、工事関係者も多いが「島をよく知ってもらうためにも、今後、観光客の取り込みに入れたい」と意気込む。

二つ目の「ヒツジ牧場」は、島にヒツジの観光牧場をつくる取り組み。島根県から五頭運び込んでオープンし、現在は七頭にまで増えた。毛刈りやエサやりをはじめ、刈った羊毛を活用した手つむぎや手織り体験などを楽しむことができる。

牧場はジャングルのようになっていた島の土地を借り、開墾して用地を確保。将来的には、島中でヒツジを放牧するのが夢だ。

「ネコの島、ウサギの島、というのがありますよね。西海の海にヒツジの島があつたら素敵じゃないですか」と福田さんは笑顔をみせる。

三つ目の「ブルーベリー栽培」は、島に新たな産物がほしい、との考えを出発点に二〇一七年二月から島で栽培を始めた。土を使わなくても植物を育てることができる養液栽培という手法を採用。作物に必要な養分や水分を、水に肥料を溶かした液状肥料として与える。

まずは二〇〇株の苗木育成から始めており、ブルーベリーを摘んでもらう観光農園として二〇一九年夏のプレオープンを目指す。今後、苗木をさらに増やして加工品をつくる構想もあり、いずれは人を雇って島の雇用創出に貢献することも視野に入れている。

### クラウドファンディングで資金調達

多角的に事業を展開しているため、自己資金をベースにそれなりの額の資金を投じているが、行政などが設ける公的補助金制度は利用しなかった。

代わりに活用した資金調達方法がクラウドファンディング。プロジェクト実現のためお金を必要としている人が、インターネット上で資金を募る仕組みで注目が高まってい

## ◎協力者を増やしながら頑張る福田さん

江島の隣にある平島<sup>ひらしま</sup>というところを拠点に、大工をしています。福田さんがやろうとしていることに共感して、仕事の合間にできる範囲でお手伝いをしています。一緒に作業することもあります、彼女はカンがいいので何でもコツをつかむのがうまいです。

福田さんと知り合ったのは、福田さんが民泊を始める際、家をリフォームする仕事を役所を通じて紹介されたことがきっかけでした。

最初、江島で民泊を始めると聞いたときは正直、大丈夫かなと思いました。江島に比べ規模が大きい平島でさえも、それほどお客さんがいるようには感じられなかったからです。

昨年、民泊を開業したときは「本当にやりよるばい」と思いましたが、半年ぐらいたったところから宿泊客も徐々に増え始めて、今はもう忙しくて私もバタバタです。インターネットも上手に活用しているようで、すごいなと感心しながら見えています。

今はヒツジ牧場でのエサやりやブルーベリー場の整備などを手伝っていますが、まだまだやるものがたくさんあります。私自身も将来、これらの事業がどうなっていくのかとても楽しみにしています。

民泊の仕事は福田さんが一人でやっていますが、本当によくやっているとと思いますよ。宿泊客が多いときは仕事量も多く大変そうですが、船の時間に合わせてきちんとさばいています。バイタリテイにあふれていて、何か手伝ってあげないと、という気持ちにさせられます。

島でも、最初は福田さんのことを「本当にできるのか」と思っていた人もいたかもしれませんが、実際に民泊もヒツジ牧場もオープンして、協力してくれる人も少しずつ増えているようです。やっぱり、島で何かをするには、島の人に愛されることが大切ではないでしょうか。

人が増えることはいいことだと思いますが、仕事がないので状況は厳しいでしょう。漁業就業の制度を利用して来る移住者もいますが、なかなか定着しません。島なので、確かに漁師は手取り早い仕事なんです、決して簡単な仕事ではないですし、船を買ったりそれなりの投資も必要になります。荒れ放題の耕作放棄地はたくさんあるので、まだ農業の方がいいかもしれません。

仕事を定年退職した後、島に移住してのんびり暮らす、といった方法もあると思いますが、医療と交通アクセスの不便さから、なかなか難しいのが現状ではないでしょうか。

福田さんも50歳代ですが、島ではまだまだ若手。島の人も私も彼女からパワーをもらっていますし、これからも夢に向かって頑張ってほしいと思います。

(西海市平島在住 大工 林 寅男)

る。福田さんは、クラウドファンディング「Ready for」を利用。三事業による江島活性化策を訴えて、目標金額だつた一〇〇万円を集めることに成功した。

さらに、ブルーベリー事業の原資としては、政府系金融

機関の日本政策金融公庫から融資を受けている。

島で働く場をつくりだすことを目的とした国境離島新法による交付金制度の活用も検討したが、条件の一つである「雇用を生み出す」点がネックとなり、申請を見送った。

島に移住し起業しようと考えている人へのアドバイスとして、福田さんは「覚悟があるかが、一番大切だと思う」と強調する。

江島に移住して事業を始めることを親類に打ち明けた時、みな口をそろえて反対したが、今では取り組みを認めてくれるようになった。福田さんは「覚悟を持ってきちんと準備すれば、何かしら道は開けると信じている」と話す。

また、最初は「一人でも山を切り拓き、事業を進める覚悟だった」が、力を貸してくれる人の輪も次第に広がりをみせているようだ。

「物事と本当に真剣に向き合っていれば、応援してくれる人はかならず増えると思います」という福田さんの言葉には、島おこしの本質が含まれている。

## 島だからこそ理学療法を

西海市国民健康保険江島診療所・理学療法士／Uターン 三根茂美さん

### 訪問診療をきっかけに「起業」を目指す

島でのインフラ整備は、人口が少ないほど優先順位が高いものに絞られ込まれる傾向がある。

もともと優先順位が高いのは、暮らしに最低限必要な水道や電気などのライフラインだろう。そこに医療機関や通

信設備、道路や港湾などが必要に応じて上積みされていく。この中で、医療機関のみに目を向けると、優先されるのはやはり医師がいる病院・診療所だろう。ケガや高齢などに伴い低下した体の機能を回復させる理学療法によるリハビリテーションは、どうしても後回しになりがちだ。

人口一〇〇人強の江島にある唯一の医療機関、西海市国民健康保険江島診療所には、じつはリハビリ室がある。優先順位のためか以前はなかったが、二〇一八年春、診療所に隣接する形で新設された。

リハビリ室の設置を行政に働きかけたのが現在、島でリハビリを担当している三根茂美さん。古希を迎えてから島にUターンした理学療法士で「島のようなところにこそリハビリ施設が必要」と力強く訴える。

江島生まれの三根さんは中学を卒業した後、島を離れた。西彼大島にあった高校を卒業して本土に渡った後、大阪府の病院に検査助手として就職。当時、体調を崩していたことが医療分野に関心を持ったきっかけとなった。

その後、知人の勧めで理学療法士と柔道整復師の資格を取得。福岡や佐賀の病院に勤務し、定年退職後は佐賀でいったん整骨院を開業したが、体調が思わしくない両親が入居していた西海市の介護施設で働くようになった。

この施設で働いていたころ、ふるさとの江島と隣の平島で、船に乗って定期的に在宅訪問にも従事していたが、この際に「島でもリハビリを行えるよう環境を整えるべきで



島にUターンした理学療法士の三根さん(71)。

はないか」と感じるようになった。

島には、運動機能が低下したお年寄りや、骨折といったけがを負う人など、理学療法を必要とする人が少なくなかった。リハビリというのは一回で終わり、というのではなく、治療を継続してこそ効果を期待できる。しかし、島の住民がリハビリのために時間と費用をかけてわざわざ本土の病院まで頻繁に足を運ぶかという点、なかなか難しいのが現状だ。患者は体が悪いことを前提とすれば、さらに

腰は重くなる。

アクセスの

問題もある。

江島と本土を

行き来する客

船は一日一往

復のみ。運悪

く通院の日に

海がしけて欠

航が続けば、

一カ月ほど治

療に行けない

こともある。

「大きな病氣

を患ってこれ

ば、多少無理

をしても本土の病院まで足を運ぶでしょうが、リハビリはそうはいきません。島の現状を見ているうちに、やはり島だからこそリハビリ施設が必要だと感じるようになりまして」

### 粘り強い働きかけで実現したりハビリ室の設置

では、島に移住して一人で起業すればよかったのでは、と思う人もいるかもしれないが、じつは理学療法士には開業権がなく、勝手に独立してサービスを提供することができない。佐賀で開業したときは、柔道整復師としてだった。理学療法士は、医師の指示なしに治療を行うことはできないという規定があり、島にある診療所にリハビリ施設を付加してもらう必要があった。

そこで三根さんは、診療所を管轄する市役所に対し、約一年にわたり粘り強く働きかけを展開。江島出身の職員の手添えもあってリハビリ室の設置が決まり、初代の理学療法士として赴任することになった。

三根さんのケースは純粹な起業ではないが、現実に即した広い意味での「起業」と言えそうだ。

勤務は月々金曜で、予約枠は一日六人に設定しているが、ほぼ毎日予約が埋まる。業務は軌道に乗っており、骨粗しょう症で動けなかった人が、畑仕事もできるまで回復するなど、着実に実績を積み重ねているようだ。

リハビリ室は、空いていた診療所の旧院長宿舎を活用し



## ふるさとの島で、島のために

移住に際して、島には実家があったので家探しには苦労しなかった。公的な支援制度も利用しなかったという。人間関係についても、Uターンということもあり患者から「標準語ではなく、江島弁で話してよ」と言われるなど打ち解けており「今のところ、特に気を遣わずに暮らすことができている。島出身であることがプラスに働いている」と話す。



江島診療所に隣接するリハビリ室。

隣接する平島には、やはりリハビリ施設がないことから、いずれ平島にも足を運び、治療することを目標に掲げる。

島への移住を考えている人へのアドバイスとしては、「その島をよく知ることを挙げる。

「島の歴史などを知らない、島の人と話ができないですね。島に〴〵入って〴〵いく最初のとっかかりは、やはり会話でしょう。島の人を味方にするためにも、本などで島のことを調べることをおすすめします」

仕事は半分ボランティア、と話す三根さんは最近、こんなことを感じることもある。

「若いころは、親とか島のことなんか全然、考えなかった。どうしたら飯を食っていけるのか、ということしか頭になかったです。でも今になって、ああ島の将来なんかも考えなければよかったと思うようになりました。飯を食えるようにはなったけれど、果たしてそれだけで良かったのだろうか、と。だから七〇歳で島に戻り、仕事もいつまでできるか分かりませんが、やれるだけやろうと。今は、そう思うばかりです」



竹内 章 (たけうち あきら)

1974年生まれ、富山県出身。元中日新聞社記者。2015年、長崎県五島列島の新上五島町に地域おこし協力隊として移住し活動。今年3月末に3年間の任期を終え、島に定着し離島在住のフリーライターとして屋号「ツムギヤ」で独立。